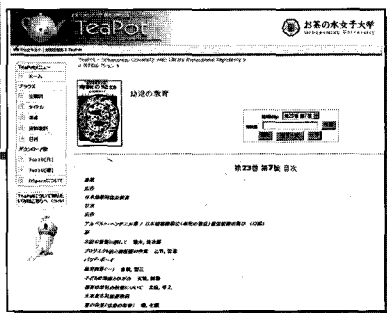


▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (9)

『幼児の教育』誌に見る 和田實の「感化誘導の保育」

日吉佳代子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション (略称 TeaPot)」にてバックナン
バーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

私は、保育者を養成する和田実学園東京教育専門学
校に長年勤務していたこともあり、創立者の和田實
(一八七六―一九五四)に関する研究をライフワーク
の一つにしてみました。『婦人と子ども』と『幼児の
教育』誌の復刻版五十四巻を、どれだけ繰り返し読ん
だことでしょうか。一年分を一冊にまとめた復刻版は、
分厚く、重たく、扱いにくく、一度に三―四冊しか持
てず、図書館との往復も苦勞しました。それがネット
上で読めるなんて、まさに夢のような現実です。
本稿では日本の幼児教育の先覚者といわれる和田實
が「感化誘導の保育」について、どのような論を展開
していたのか、『婦人と子ども』誌に掲載された和田
實の初期の論文、明治三十九年から四十三年ころにか
けての「誘導保育論」を紹介したいと思います。

まず初めに、和田實の業績と思想の背景を簡単に紹
介します。和田實は、明治三十年に神奈川県尋常師範

学校を卒業していますが、そこで当時の校長だった中村五六と出会い、幼児教育の世界に入り、明治三十九年から大正四年にかけて東京女子高等師範学校の助教として教鞭きょうべんをとり、幼児教育の理論を研究し、「幼児教育法」「実験保育学」「保育学」などの著書を著しています。

和田實は、J・ルソー、J・ペスタロッチ、F・フレーベルなどに学び、自らの保育理論を「自然主義的教育」と称し、幼児は遊びの中で自然に学習し成長発達するものであるから、幼児教育は遊びの生活を通して、その心身の調和的な発達を助長するものであると主張しています。

和田實が幼児教育界で活躍を始めた明治三十九年（一九〇六）からすでに百年を過ぎていますが、和田實の「感化誘導」の保育の考え方は、現在の「幼稚園教育要領」の「子どもの主体性を大切に、環境を通して、遊びの中で総合的に指導し援助していく」とい

う考え方に受け継がれています。

和田實は大正四年に自らの幼児教育の理論を実践するために「目白幼稚園」を設立し、また良い保育者を養成する必要から「目白幼稚園保姆養成所（現在の東京教育専門学校）」を設立し、生涯を幼児教育の発展に尽くしたのです。

明治後期の当時、幼児教育の啓蒙書として発刊されていた『婦人と子ども』誌上に、和田實は明治三十九年発行の第六巻から次々に論文を掲載し、幼児教育を教育の体系に位置づける努力と、和田實独自の幼児教育理論「感化誘導の保育」を展開しています。また明治四十二年からは、『婦人と子ども』誌の編集主幹としてかかわっています。昭和二十九年一月に亡くなるまでの間に、『幼児の教育』誌上には、八十八編の論文と「湘南または湘南生」のペンネームで、十二編の記事が掲載されています。

「誘導保育」というと、倉橋惣三から始まると思っ

いる人が多いのですが、実は、倉橋惣三が「誘導保育」を主張するより二十五年も前に、和田實は「感化誘導の保育」を理論化していたのです。和田と倉橋は、ほとんど同時代に活躍した人ですが、倉橋より早く東京女子師範学校に入った和田實は、幼児の遊びによる教育と感化誘導の保育方法を、明治四十年には主張していました。

『婦人と子ども』誌上に、和田實の「感化誘導」の言葉が初めて出てくるのは第七巻第三号で、「子どもの早熟」の文章中の二十二頁に見られます。次のような言葉で表現されています。

「遊戯中に現はる幼児の活動は出来る丈口舌で以て左右しないで、止むを得ずして、禁止や命令を用ゆる時の外は、成る可く模範に因って導き模倣力を利用して誘ふと言うことにしなければなりません。即ち感化誘導の中に極めて自由に極めて快活に幼児を引き込み不知不識の間に啓発して行くと言うことに



▲『婦人と子ども』第七巻第三号表紙
明治40年3月発行

ならねばなりません。殊に幼児を極めて鷹揚に上品に育て上げたいと言う時には尚更子供を口舌で引き廻はして発達させ様としてはだめです。反省力も発達せず、自覚も充分でない幼児にはとても思考に因って己れの行動を左右し様などと言う考へは無理にも起こさせられぬものです。故に幼児教育は徹頭徹尾模倣的誘導、無意識的感化と言うことで進まなければならぬものです。」

和田實はこの論文の中で、「遊戯は子供の生命で之が為に子供は発達して行くのです」と述べ、子どもの

自由な遊戯活動が大切なことを強調しています。そして大人の考えで子どもの遊びを左右せず、「模倣的誘導」「無意識的感化」によって、不知不識（しらずしらず）の間に教育の目的に向かつて誘導していくという考えを述べています。

また、この論文中に面白い保育の例が書かれています。

「如何がわしき幼稚園などにては父兄の御機嫌を損じて退校されては大変と一意歡心を得んが為めに教育上の利害を措いて問わず只管ひんすらこむかし小六ヶ敷しい手技などを課して半ば以上保姆の手伝つたものを御土産として持帰らせて御坊っちゃんやお嬢さんの成績は斯の通りと自家信用の広告をして居るものもあるそをですが、斯かる人々の目が覚めぬ中は幼児教育も到底存分に發展する訳には参りませんまい。」（十九、二十頁）

この文章に書かれている内容は、現在でも見受けら

れる保育の姿であり、幼児教育の草創期に指摘されて以来百年も経っていても、まだ目が覚めずに繰り返されている実践例といえます。遊戯における子どもの興味や関心を伸ばし、子どもが遊びを創っていくプロセスを大切にすることが幼児教育の課題なのに、活動の結果を目立たせて大人の関心を得ることを目的にした活動や保育になっていることは、改良すべき課題の一つです。

第八巻第四号（明治四十一年四月発行）掲載の「保育論上に於ける根本的二思想」（七、十頁）では、旧来の幼児教育の考え方と和田實の主張する新思想とを対比させて、次のように述べています。

「遊戯を利用して教育す可しと言うことは幼稚園教育上に於ける従来の思想なり、現在も斯る見解を以て我幼児教育を律して行こうと言う考を以て居る人は決して少くない様であるが、是が果して正当な考であろうか吾人は之を疑ふものである。否吾人は是

が従来の幼稚園教育に種々な弊害を醸さした原因であると思うのである。一体利用などと言う言葉はともすると廢物利用などの利用と言う言葉と同様に考えられるものであるから遊戯を利用して教育すと言えば、遊戯と教育とは本来全く異なつて居るもの無関係のものではあるが併し之を甘く用ゆれば教育的効果があるものであるからそこで教育に利用す可しであると言う様に聞える、イヤ實際斯様に考へて居る人が少くない様である、是は全く間違つた考へと言わねばならぬ、此論鋒で行くと遊戯は本来教育的のものではないが之を利用し遊戯の仮面を被つて幼児を瞞着とんぢやくすることに因つて教育することが出来ると言ふ様な議論になるから従つて此主義を奉ずる人から見ると遊戯的に教授することは幼稚園本来の仕事であるかの様に考えられている。」(七頁)

「幼稚園は単に幼児の遊嬉場である、消極的に言へば害なく危険なく幼児の遊ぶ所である、積極的に言

へば理想的に完全に幼児をして遊ばしむる所である、旧来の思想に従へば遊戯と教育とは元来一致す可きものでないと言ふのであるが新思想は全然此見解に従わぬ、従わぬのみならず遊戯を以つて全然教育事項中の一事項とするのである、換言すれば幼児をして遊戯せしむることは取りも直さず一つの教育を行つて居るのであると言ふのが保育上の新思想である、従つて最もよく遊びたる子供は最もよく教育せられた子供であると言ふのが新派の理想である。」(九頁)

「幼児の良習慣は其の境遇次第で不知不識の間に自由に賤らる可きもので又是が正当な順路で決して脅迫しに压制して押し付く可き筈のものではない、少くも感化誘導を主とする幼児教育に於いて採る可き方針ではない。」(十頁)

和田實は、保育を教育の体系に位置づけて、「幼児教育」という言葉を最初に使つた人であると自ら述べて

います。そして幼児教育を理論化し、幼児教育の二本の柱を、「訓育」と「遊戯」とし、遊戯による幼児教育を主張したのです。そして遊びには、「興味と快感、自由、社会的影響」が伴うものであることを述べ、子どもが興味に応じて自由に楽しく遊ぶうちに、保育者が教育の目的に向かって誘導していく「感化誘導」による保育を主張しています。明治時代の末のころの保育界に、この和田實の保育論がどう位置づくのか、和田實自身がこの論文の最後に次のように述べています。

「作し此主義の及ぶ所は其範圍が中々広くて現在の保育界をして殆んど一変せしむる程に大変革を要するものである、吾人は折を得て時々本誌上に之を開陳し會員諸君の高評を得んとするものである。」(十頁)

このような文章を読むと、和田實の保育理論は、現在では当たり前に入れていることができる内容なのに、大変革を要することであるということは、当時の

保育がいかに保母主導の保育であったかがわかります。子どもたちのためにと和田實の心血を注いだ情熱が伝わってきます。

明治四十三年十一月発刊の『婦人と子ども』第十卷第十一号誌上の巻頭言に「感化誘導」の文章があります。目次には「記者」と書かれています。これは和田實が書いた文章と考えられます。

この文章では、「感化誘導」の理論は幼児教育のみならず、小・中・高校、大学、どの段階にも当てはまることで、教育者に等しく与えられた課題であることが述べられています。最近では大学教育でも、いかに学生の興味や関心を呼び覚まし自発的に授業に取り組み、知識や技能を自分のものとしていくか、それに大学教員がどうかかわるかが大きな課題となっています。

和田實のいう感化誘導し教育の目的に向かって導いていくという教育方法は、これからも永遠に続く教育の課題ではないでしょうか。(宇都宮短期大学教授)